

2-10.中央構造線沿いに点在する集落の祭礼と信仰にみる歴史的風致

(1)はじめに

浜松市内には、天竜区佐久間町と同水窪町をほぼ北東方向に中央構造線が横切っており、中央構造線に特徴的な地形を見渡せる場所は、「ホウジ峠の中央構造線」として、静岡県天然記念物に指定されている。

「中央構造線」は、日本列島最大の断層で、これを境に両側で大きく地質が異なり、急峻で複雑に侵食された山間部でも、この断層に沿って直線的に形成された谷地形を見ることができる。また、内帯側¹には、いわゆる領家帯の花崗岩類が分布し、佐久間町の、天竜川が愛知県との境となる付近では、標高 926.4 メートルの矢岳山を造り、また、佐久間ダムの基盤を形成している。

また、中央構造線は、人々の営みにも影響を与えてきた。

山間部を通る中央構造線沿いには谷地形ができ、この谷地形は、秋葉街道や塩の道などと言われる谷筋に沿った街道を生み、古代・中世から人々が往来した。そして、こうした街道沿いや山の中腹や斜面・谷を流れる川沿いには集落やまち並みが築かれた。近代では、この谷地形を利用して、鉄道(現 J R 飯田線)が通っている。

また、山間部特有の山と谷からなる地形は、修験道の信仰・修行の場として根付くとともに、中央構造線の谷筋に沿ってできた古来からの街道では、修験者のほか、物資を運ぶ人など様々な人の往来と共に文化や伝統芸能が伝来し、これらは、そこに住まう人々の生活に、日常や祭礼といった行事として根付いていった。

こうして伝来した文化は、北側の水窪町には、南信濃の方から田楽系の芸能が伝わったが、奥三河に多い花祭(花の舞)は、南側の佐久間町に根付くなど、その伝来ルートの違いから、同じ中央構造線沿いの集落であっても、それぞれ異なる様相を呈している。

中央構造線の存在により生まれた街道や修験者の通る道は、市内南部を通る東海道のように主要な街道ではなく、それが故に、伝来も容易ではなかったが、伝来した文化や伝統芸能は、他都市の影響を受けにくく、内容はそれぞれに異なるが、現在でも、古くからの伝統が色濃く残されているという点で共通している。このように、特異な条件により伝来し、大切に守り伝えられてきた祭礼などは、歴史と文化を今に伝えている。



図2-10-1 ホウジ峠の中央構造線

¹ 日本列島の地質構造は、中央構造線を境に大きく異なり、日本海側を「内帯」、太平洋側を「外帯」として大きく二分され、岩石の分布も中央構造線を境に一転する。

(2)水窪町西浦地区にみる歴史的風致

①はじめに

天竜区水窪町西浦地区は、水窪町奥領家の最北部、翁川の上・中流域に位置し、その中央付近を南北に中央構造線がとおり、これと並行するように翁川が流れている。西浦地区は、翁川に沿って池島・所能・大栗平といった集落が点在し、それらの集落が一つとなり、15戸(令和元年(2019)時点)の旧家からなる能衆¹と呼ばれる世襲制の人々によって、およそ1300年続くといわれる田楽が伝承されている。

▼中央構造線の谷地形



図2-10-2 西浦所能観音堂境内から中央構造線を臨む

②歴史的風致を構成する建造物

ア.西浦所能観音堂

西浦所能観音堂は、重要無形民俗文化財「西浦の田楽」が行われる堂宇で、天竜川の支流水窪川の源流をなす翁川の西岸、観音山の麓の斜面に建つ、桁行3間、梁間3間、寄棟造、金属板葺の建物である。現在の堂宇は、明治25年(1892)に建てられたと言われており、昭和40年(1965)には修理工事が行われたことが奉納額よりわかっている。

堂内は本尊・正観音菩薩²を安置し、田楽面を保管する内陣と外陣とに分けられている。

西浦の集落では、観音堂境内で舞われる旧暦1月18日の西浦の田楽をメインとして、前日の御開帳のほか、2か月にわたり、観音様のお祭りが行われる。



図2-10-3 西浦所能観音堂と能衆

¹ 正観音菩薩を祀り、西浦の田楽を行う祭主である別当、祭祀のお供えなどの世話をする公文衆、上組・中組・下組の三組からなる、舞を担当する能頭などの役割がある。

² 現物は聖観音に相当する。現地のお札などでは「正」の字が使われているが、別当が著した書物などには、「聖」の字を使用するものもある。

③^{みさくぼ}水窪町^{にしうれ}西浦地区にみられる活動

ア.^{にしうれ}西浦^{でんがく}の田楽

a.^{にしうれ}西浦^{でんがく}の田楽の概要

^{にしうれ}西浦^{でんがく}の田楽は、地元では「お祭り」とか「観音様のお祭り」と呼ばれてきた¹農祭に演じられるもので、^{にしうれ}西浦^{でんがく}所能^{にしうれ}観音堂^{のうかんのだう}の境内にて、毎年旧暦1月18日の月の出から翌19日の日の出まで、夜を徹して舞われる^{でんがく}田楽であり、五穀豊穰、無病息災、子孫長久、^{すいか}水火の難を除く神事である。

地能33番、はね能11番(閏年に限って舞われる^{うる}閏舞を入れると12番)、しずめとして総称される獅子舞、しずめ、火の王、水の王で構成されている。

「地能」は、神事としての演目で、三十三観音に照らした33番からなり、舞手の多くは世襲で定められている。そのうち、11番の「舟渡し」は一つの見所で、^{いけしま}観音堂から^{たいまつ}池島タイと呼ぶ柱松明に渡された舟綱に導かれ、松明を乗せた舟が^{いけしま}観音堂から^{たいまつ}池島タイまで渡され、その火で松明に点火する。また、27番の「君の舞」、^{おう}仏の舞に先立って六^{おん}観音様の通り道を祓い、その庭を作る演目といわれる28番の「^{でんがく}田楽舞」、^{ぎやうどう}千手観音ほか六^{おん}観音様の^{ぎやうどう}行道である29番の「^{おん}仏の舞」が、この祭りのクライマックスとされている。

「はね能」は、いずれも面をつけての舞で、^{おん}観音様への奉納芸である。平年は11番、閏年は「^{うるまい}閏舞」が加わって12番となる。順序は、「高砂」、「しんたい」、「^{ばいか}梅花」の最初の3番までと、最後の「^{おん}弁慶」以外は特定されていない。そして舞手も能衆であれば誰でもよいとされる。はね能は、舞手が^{ふエ}笛や^{たいこ}太鼓の囃子と謡いに合わせて舞う。

地能・はね能を舞い終わると、「しずめ」とも総称されている祭りの最後を締めくくる「獅子舞」、「しずめ」、「火の王^{おウ}」、「水の王^{おウ}」の演目となる。「しずめ」は、祭りに招いた神々に、本国へお帰り願う神事であり、「火の王^{おウ}」・「水の王^{おウ}」は祓いの演目である。



図2-10-4 舟渡し



図2-10-5 仏の舞



図2-10-6 弁慶



図2-10-7 しずめ

¹ 「お祭り」や「観音様のお祭り」とは、田楽を含むお祭りの一連の行事をさす名称であるとともに、現地では、西浦の田楽をさす場合もある。

これらの奉納芸能は能衆と呼ばれる世襲の家々により伝えられており、松明の準備や消防警護など地域の人々とともに行事を行っている。

西浦の田楽は、養老3年(719)、行基が当地を訪れ正観音菩薩の仏像と面を作り、その年から祭が始められたと伝えられている。面の名称は、観音6面、薬師、火の王、水の王、しずめ、雌雄の猿、赤鬼、白鬼、高砂、しんたい、さおひめ、治部、のたさま、翁、三番叟、獅子などである。現存する最も古い記録としては、享保年間(1716-1736)の『正観世音祭人別控覚帳』に、地能33番の演目などが記されている。

b. 祭りの流れ

祭りは、前年の旧暦12月晦日に行う神事(秘事)に始まり、^{ひえざけ} 稗酒作りやお神酒上げ、^{みき} 精進入りや前日の「御開帳」・道具整備など数々の行事を経て、旧暦1月18日に当日を迎える。この祭りの祭主は「^{べつとう} 別当」であり、祭りは、別当を含む「能衆」による世襲で受け継がれている。

祭礼の流れと西浦の田楽の演目の詳細は表2-10-1から表2-10-4のとおりである¹。

田楽が舞われる18日当日は午前中に、別当が自宅の屋根裏部屋で秘事の「^{てんぐ} 天狗祭り²」を行い、午後^{がくどう} 楽堂が組み立てられ、「おこない³」が始まる。午後7時半、能衆全員が別当屋に参集する。お神酒上げのあと、松明に導かれて庭上り⁴をし、山の稜線から月が出るころ、楽堂前で地能33番とはね能11番(閏年は12番)の田楽が始まる。

夜通し続く田楽も、しずめの行われるころには夜も白んでいき、山の稜線から日が出るころ、西浦の田楽のすべての演目が終了する。田楽が終わると能衆は帰宅するが、どの家でも草鞋や草履を履いたまま座敷に上がり、神棚を拝む。そして、吸い物をいただいてから^{ぞうり} 草履を脱ぐ。

観音様のお祭りでは、昼間の行事は特定の場所に陽がさす時刻から、そして夜は、月の出にあわせた午後9時ごろから始まり、真っ先に庭火である横タイに点火される。池島タイと呼ぶ柱松明に点火されるのは午前0時ごろ。祭りが終わるのは日の出にあわせた午前8時ごろである。途中、月が背後の山陰に隠れる午前2時ごろに「くらいれ」と呼ぶ休憩となる。また、横タイが切り火で起こされた火であるのに対して、池島タイに点火される火は古くは



図2-10-8 月の出



図2-10-9 日の出



図2-10-10 西浦の田楽(出体童子)

¹ 演目の名称については、表2-10-2から表2-10-4に示したが、各演目の表記や読みには諸説がある。

² この地方の禰宜や別当などが祭り前に行う神事で、秘儀であり、その内容は何人にも明かされていない。

³ 決められた一部の能衆が楽堂に入り、お神酒上げ、エンマズミ(法印墨ともいう。能衆のはちまきに黒く墨印を押す。)を行う。

⁴ 西浦の田楽の奉納にあたり、別当の屋敷から西浦所能観音堂の境内へ続く階段を能衆が上がること。

太陽からとった天火であったようである。このように、西浦の田楽は、月と太陽を重視し、自然界の営みを拠り所にして見事に設定されており、日本人が抱いていた自然への畏敬の念が、今も強く息づいている。このことは、山に囲まれた中に中央構造線が縦断する西浦の集落の中であって、西浦の田楽が行われる観音堂の境内から、山の稜線からの月の出や日の出が見られ、これらが西浦の田楽の進行と深く結びついていることから感じられる。

表2-10-1 「観音様のお祭り」の主な行事の流れ

年月日	祭りの内容	補足	備考
旧暦12月晦日	神事(秘事)		
旧暦1月7日	くもんしゅう 公文衆の年賀 別当祝いの稗酒造り		別当精進入り
旧暦1月11日	能衆の稗酒造り 能衆の年賀		能衆精進入り
旧暦1月15日	オニグス ¹ 造り・稗団子作り		
旧暦1月16日	稗酒の「別当／能衆 祝いの口開け」		別当、家庭と別火生活に入る
旧暦1月17日	御開帳	御本尊の扉を開く・仮面を開帳する・奥院鎮守、熊野権現の御開帳	
	奥院鎮守祭	別当祝い・お神酒上げ・庭上がり	
	奥の院の舞		
旧暦1月18日朝	天狗祭り		別当屋の屋根裏部屋で行われる秘事
	楽堂組立		
旧暦1月18日昼	おこない		
	めんさいずり	面が彩色され、魂が込められる	
旧暦1月18日夜 ～1月19日朝	西浦の田楽	お神酒上げ・庭上がり 地能・はね能・しずめ	
旧暦1月19日	能衆の帰宅		

¹ お神酒上げに使用する米の甘酒。

表2-10-2 地能の演目

演目
①庭ならし
②御子舞 ^{みこまい}
③地固め
④もどき
⑤つるぎ
⑥もどき
⑦高足
⑧もどき
⑨猿舞
⑩ほだ引き
⑪舟渡し
⑫鶴の舞
⑬出体童子 ^{でたい}
⑭麦つき
⑮田打ち
⑯水口 ^{みなくち}
⑰種蒔き
⑱よなぞう
⑲鳥追い
⑳殿舞
㉑惣とめ
㉒山家惣とめ ^{やまが}
㉓種おり
㉔桑取り
㉕糸引き
㉖餅つき
㉗君の舞
㉘田楽舞
㉙仏の舞
㉚治部の手 ^{じぶ}
㉛のたさま
㉜翁
㉝三番叟

表2-10-3 はね能の演目

演目
①高砂
②しんたい
③梅花 ^{ばいか}
④観音の五法楽
⑤山姥 ^{やまうば}
⑥さお姫
⑦鞍馬
⑧狸々 ^{しゅうじょう}
⑨ののみや
⑩八島
⑪閨舞
⑫弁慶

※上表④～⑪の演目は、順番が定ま
ていないため、表とは順番が変わること
がある。

表2-10-4 しずめ

演目
獅子舞
しずめ
火の王
水の王

④まとめ

西浦地区に伝承される田楽は、山の稜線から見える月の出・日の出が田楽の始まり・終わりと結びつくなど、月と太陽を重視し、自然界の営みを拠り所に進行が設定されているもので、田楽が行われる西浦所能観音堂の建物や、田楽を伝承する能衆の家を含む集落が点在する中央構造線のおおる山間の景観など、自然環境を含めた周辺環境と一体となって、良好な歴史的風致を形成している。

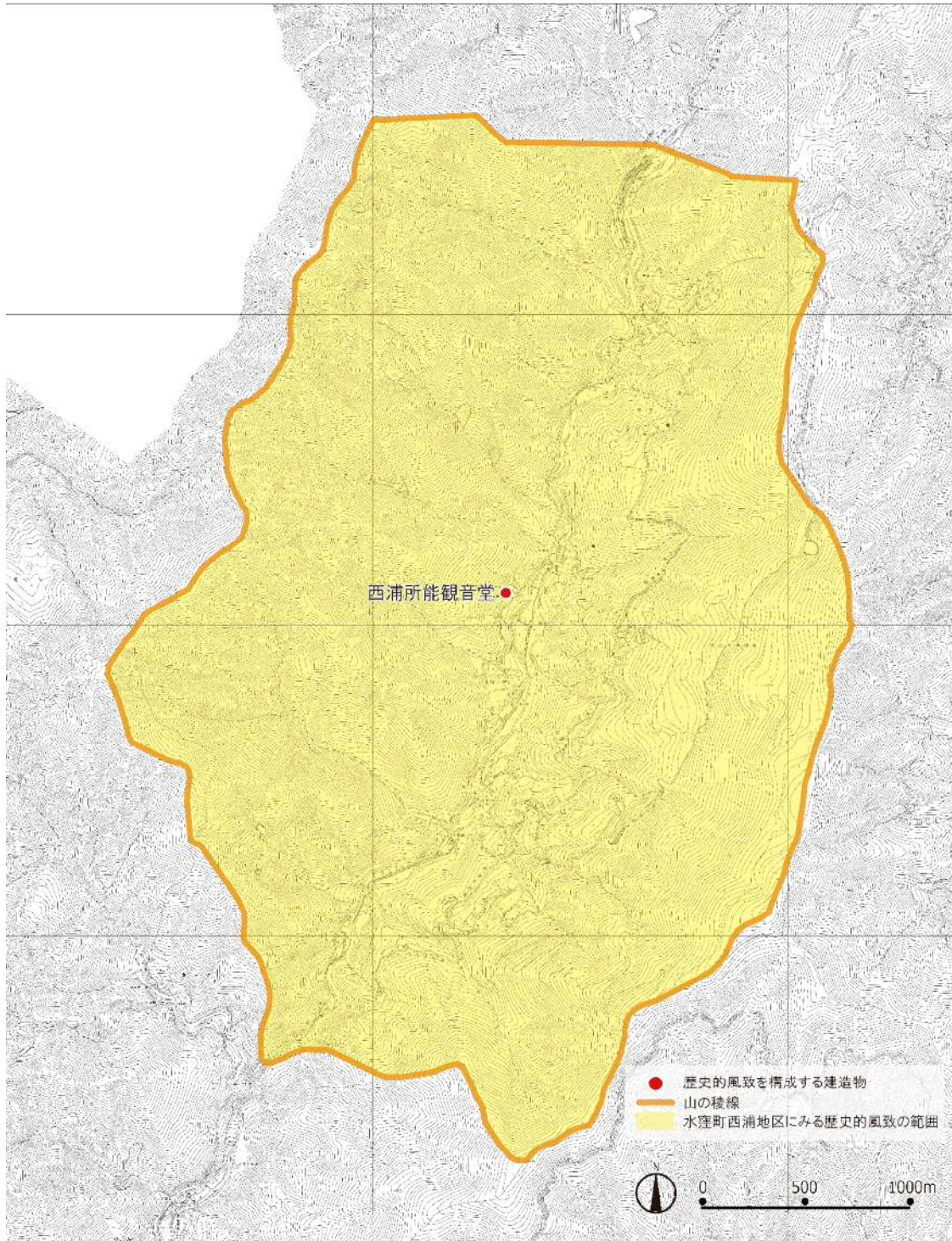


図2-10-11 水窪町西浦地区にみる歴史的風致の範囲

(3)水窪町市街地にみる歴史的風致

①はじめに

天竜区水窪町の市街地は、水窪川と翁川が合流する付近に位置し、水窪川によって、右岸側が奥領家、左岸側が地頭方と言われる地域に分かれている。この付近の中央構造線は、市街地をかすめるように通っている。また、中央構造線が近い水窪町市街地は、「塩の道」とも呼ばれた秋葉街道が縦断し、宿場町として栄えた街でもあり、念仏踊や八幡神楽といった伝統的な民俗行事や盆行事とともに、水窪まつりのような屋台の引き回しのある賑やかな祭礼も行われている。



図2-10-12 水窪町市街地

②歴史的風致を構成する建造物

ア.神原薬師堂

由来書によると、神原薬師堂は、永禄6年(1563)に創建されたが、明治6年(1873)の浜松県の布達により、明治7年(1874)には善住寺に合祀された。しかし、明治16年(1883)、信徒の参拝不便解消のための県への請願が許可され、明治17年(1884)に復旧し、現在に至る。現在の建物は、堂内の寄附者芳名書によると昭和27年(1952)建築のもので、昭和55年(1980)には改築工事がなされるとともに仁王門が造営された記録も残る。薬師堂は桁行3間、梁間4間、入母屋造平入り、金属板葺の建物で、前面に、桁行3間、梁間2間の仁王門が配置されている。

毎年8月10日には、若連と保存会のほか地域の人々が神原薬師堂に集まり、ここから水窪の念仏踊(神原の虫送り)の行列が出発する。薬師堂にて、和讃と念仏踊が行われたあと、弓灯籠¹と虫送り灯籠を先頭に太鼓・双盤・笛などを従えて、永福寺までの道行きとなる。

また、8月16日には送り念仏供養も行われている。



図2-10-13 神原薬師堂(正面仁王門側)



図2-10-14 神原薬師堂

¹ 2本の弓を十文字に組んでその先に灯籠を吊るしたもの。

イ. 永福寺

神原地区の菩提寺で、弘治元年(1555)に創建された曹洞宗の寺である。本堂は桁行7間、梁間5間、入母屋造平入り、瓦葺の建物で、寛政11年(1799)に建立され、昭和41年(1966)に修理が行われたことが棟札から分かっている。

毎年8月10日、水窪の念仏踊(神原の虫送り)が行われ、神原薬師堂を出た念仏衆が商店街を通り、最後にこの永福寺で念仏踊を行う。



図2-10-15 永福寺本堂

ウ. 神原八幡宮

神原八幡宮は、神原・水窪両地区(神原・大里・本町地区)の産土神で、神原区文書によれば、弘安3年(1280)に創建された。明治6年(1873)の浜松県の布達により、明治7年(1874)にほかの神社とともに山住神社に合祀され、神社跡地は水窪小学校になったが、明治13年(1880)、現在地に再び社殿を建立し現在に至る。現在の社殿は棟札によると昭和12年(1937)9月13日に造営・遷宮されたもので、桁行3間、梁間3間、入母屋造平入り、銅板葺の拝殿の後ろに幣殿、本殿と配置されており、昭和初期の写真が残っている。

例祭は向市場春日神社、小畑諏訪神社との3社合同で「水窪まつり」として行われており、神輿渡御のほか屋台の引き回しや仮装コンクールなどが行われる。



図2-10-16 神原八幡宮拝殿



図2-10-17 神原八幡宮(昭和初期)(右から本殿・幣殿・拝殿)

③ 水窪町市街地にみられる活動

水窪町の市街地では、市街地特有の賑やかな祭りが開催されるほか、水窪の念仏踊や獅子舞神楽など、その土地特有の特徴を持った活動が見られ、それらは、住民たちにより古くから伝承されてきている。

ア. 神原の虫送り

天竜区水窪町の各集落には、伝統的な民俗行事や盆行事が受け継がれており、念仏踊もその一つである。水窪の念仏踊のうち、神原地区に伝承されている念仏踊は「虫送り」または「デンデコ」と呼ばれ、毎年8月10日に行われている。念仏踊の行列は、神原薬師堂から

商店街を通り、^{かんぼら}神原地区の^{ようふくじ}菩提寺・永福寺へと向かう。

虫送りは、虫に姿を変えたまま鎮まらない靈魂を供養し、家内安全・五穀豊穡を願う念仏である。江戸時代前期からこの地に伝承されていると言われて^{むしおく}いるが、虫送りで使用される^{そうばん}双盤に「寄附者 神原区民一同 昭和二十七年(1952)八月吉日」と刻まれていることから、少なくともこのころには行われていたことが確認できる。この双盤は、戦時中に供出され、戦後しばらくなかったものを^{かんぼら}神原区民が寄贈したものと言われている。

8月10日の昼間には、^{むしおく}虫送りに先立ち^{ようふくじ}永福寺で^{せがき}施餓鬼供養が行われる。施餓鬼供養では、^{せがき}施餓鬼札と呼ばれる札が飾られるが、参列者は、この札を持ち帰り、虫の害から守ってくれることを念じて田畑に立てる。

午後6時ごろになると、^{むしおく}虫送りのため、若連・保存会・地区住民らが^{かんぼらやくしどう}神原薬師堂に集まってくる。そして、午後6時過ぎから、^{やくしどう}薬師堂にて若連・保存会による^{むしおく}虫送り念仏が始まる。保存会の人たちは、堂内に外に向かって座り、念仏を唱え、浴衣姿に赤い花飾りの付いた鳥追い笠をかぶった若連の青年が、^{ぼち}笛と双盤に合わせ、堂前に置いた太鼓を桴でたたきリズムを刻む。また、トウロウサシと呼ばれる保存会の最長老は、弓灯籠を持って「五方拝」をする。その後、^{やくしどう}薬師堂横の広場で、若連が太鼓を片手に持ち、^{やくしどう}笛と双盤に合わせ、太鼓を叩きながら舞う。こうした^{やくしどう}薬師堂での所作のあと、^{ようふくじ}永福寺までの「^{みちゆ}道行き」となる。途中、八幡森の地蔵があったと伝わる「八幡森の道標」前、足休島の「行者様」の祠のある崖の下付近、^{白山²}・^{地蔵}・^{庚申}の祠近くの^{ようふくじ}永福寺に入る門前の3か所で念仏和讃を手向けながら、^{ようふくじ}永福寺へ向かう。^{かんぼら}神原地区の大通りに出ると、各戸では迎え火がたかれ、行列一行を出迎える。念仏踊も華やかな道行きの「練り」に変わり、太鼓と双盤が躍動的な踊りを披露する。^{ようふくじ}永福寺に行列が到着すると、本堂の前で五方拝が行われ、寺念仏が唱えられる。こうして、^{ようふくじ}永福寺で



図2-10-18 念仏和讃と太鼓・笛・双盤



図2-10-19 道行き(練り)



図2-10-20 念仏和讃と五方拝(右の黒羽織を着た人がトウロウサシ)



図2-10-21 道行き(練り)



図2-10-22 永福寺での様子(若連が太鼓を叩きながら舞う様子)

¹ 五方(中央・東・南・西・北)の悪霊を鎮め、その場を清める所作をする。

² 現在、この場所に白山の祠は確認できなかったが、長年虫送りに参加していた古老の方の話によると、ここにあると言われていたという。

も^{かんばらやくしどう}神原薬師堂と同様に太鼓を叩きながら舞い、「五方拝」と保存会による和讃が^{むし}唱えられ、虫^{おく}送り^{ねんぶつ}念仏が終了する。



図2-10-23 神原の虫送りの道行きルート

イ.水窪まつり (向市場春日神社、神原八幡宮、小畑諏訪神社合同祭礼)

水窪まつりは、毎年9月第3月曜日の前の土曜日と日曜日に行われる向市場春日神社、神原八幡宮、小畑諏訪神社の合同祭礼である。かつては集落ごとの夏祭りであったが、合同で行われるようになり、祭日も9月14・15日と決まっていたが、平成16年(2004)ころから現在のように変更された。

各神社での神事のほか地域をあげて盛大な余興が催され、水窪町域全体の祭りとして親しまれている。屋台の引き回し、若連の囃子流し、花火の打ち



図2-10-24 水窪まつり(仮装コンクール)

上げのほか、大正年間(1912-1926)から続く仮装コンクール(仮装行列)が特徴で、普段は静かな山里が祭りと多くの観光客で賑わい盛り上がる。昭和37年(1962)の神原八幡宮の神輿渡御

の写真や、昭和34年(1959)の仮装行列の写真が残り、そのころの賑わいの様子が見て取れる。

現在でも、^{かんばらはちまんぐう}神原八幡宮の神輿渡御や^{みさくぼ}水窪町商店街の通りを会場としての仮装コンクールを行うとともに、写真コンテストも開催されており、^{みさくぼ}水窪地域内外を問わず多くの来場者が訪れる。

若者(若連)の囃子の流しは、土曜日・日曜日の両日とも、早朝から始まり、揃いの法被で太鼓と笛で囃しながら町内をまわる。早朝は静かな曲を流して歩いたが、これは、祭りの開始を知らせてまわるものだったという。

仮装コンクールは、両日の昼間に行われ、多くの出場者が町内4か所に設けられた審査会場を渡り歩き、そこで演技を披露し、競い合う。子供からお年寄りまで、幅広い年代の人が参加する、^{みさくぼ}水窪まつりのメインイベントである。

屋台は、^{かんばら}神原・^{おぼた}小畑・^{ほんまち}本町・^{むかいちぼ}向市場の4台が引き回される。町ごとに揃いの法被を着て屋台上に太鼓を載せ、笛が屋台に付き従って賑やかに囃しながら、土曜日・日曜日の両日とも、夕方から夜にかけて通りを練り歩く。これらの屋台は、昭和30年代から40年代ごろに製作されたり、他の地域から譲り受けたりしたもので、暗くなって唐破風型の屋台に^{ちようちん}提灯の火が灯ると、祭りをより一層引きたてる。

そして、土曜日の夜には^{みさくぼ}水窪川の河原から花火が打ち上げられ、祭りに彩りを添える。

また、^{みさくぼ}水窪まつりは、この地域の3つの神社の合同祭礼であり、前述の余興は^{かんばら}神原・^{ほんまち}本町、^{おぼた}小畑、^{むかいちぼ}向市場の地域全体で行われるが、神事はそれぞれの神社で行われる。そのうち^{かんばらはちまんぐう}神原八幡宮では、日曜日に神輿渡御が現在でも行われている。現在の神輿は昭和37年(1962)に献納されたものである。また、^{はちまんかぐら}八幡神楽(獅子舞)の奉納や神輿を先導する形での神楽の道中舞も行われている。神輿渡御の一行は、^{かぐら}神楽の獅子が道中舞を舞いながら先導し、先旗、猿田彦や太鼓などの後ろに神輿が続く。かつては神輿を担いで移動したが、現在では、担ぎ手の高齢化などの理由で、軽トラックの荷台に載せて渡御を行っている。令和元年(2019)は、八幡宮を出発し、^{みさくぼ}水窪小学校の南側を周ってから^{だいら}大里仲町を北上し、^{おぼた}小畑の境から^{おんだしざわ}押出沢を下って駅前通りに出ると、^{みさくぼ}水窪協働センターに設けたお旅所(大里神幸所)にて神事と^{かぐら}神楽の奉納を行った。午後は、大里仲町から^{ほんまち}本町へ進み、^{みさくぼ}水窪橋たもとの元永楽屋前のお旅所(水窪神幸所)



図2-10-25 水窪まつり仮装行列
(昭和34年(1959))



図2-10-26 水窪まつり(屋台引き回し)



図2-10-27 神原八幡宮の神輿渡御と八幡神楽

にて同様に神事と神楽^{かぐら}を奉納し、本町から大里に引き返して新道の登り口で水窪^{みさくぼ}小学校の方向へ進み、小学校の南側を^{はちまんぐう}通^{はちまんぐう}って八幡宮へ還宮となった(順路は、年ごとに逆となる)。その後、八幡宮で本祭が行われ、例年であれば、渡御の出発前と同様、八幡宮でも神楽^{かぐら}の奉納が行われるが、令和元年(2019)は本祭後の神楽舞奉納は省略となった。



図2-10-28 水窪まつりの屋台引き回しルート及び神原八幡宮の神輿渡御ルート(令和元年(2019))

ウ八幡神楽

天竜区水窪町では、獅子舞のことを「神楽」と称し、水窪各地の多くの集落で、神楽(獅子舞)が演じられてきた。現在活動しているのは神原と竜戸の2団体のみだが、神原八幡宮の祭典でもある水窪まつりや例大祭の際には、八幡神楽保存会により今でも神楽が奉納されている。

神原の神楽は、戦前までは地域の有志で継承していたが、昭和21年(1946)神原青年文化部が神楽を継承、その後、昭和52年(1977)八幡神楽保存会が設立され現在に至る。

八幡神楽保存会発足時にかかれた『神原神楽の由来』によると、昭和初年の神原八幡宮の矢場開きの際が神原での神楽舞の初演とされ、このときには河内の舞子に舞ってもらったとのことである。

これを見て神楽熱が高まり、神楽舞を希望する者が増え、獅子頭が寄附されたことも相まって、神楽舞の機運が高まり、有志のメンバーで道中練りと悪魔祓いを会得し、巡業にも歩いた。その後、後継者にも恵まれ、昭和24年(1949)には獅子頭を追加、それ以来、通常は2頭で舞っているとのことである。昭和25年(1950)ごろの神原八幡宮祭典の際の記念写真や、神原八幡宮の神輿を先導して舞う神楽の姿を映した昭和34年(1959)の写真も残されている。

この神楽は五穀豊穡、邪気退散を願って舞われるものである。

神原神楽の舞は、水窪まつりの際には神原八幡宮の神輿を先導する「道中舞」と、神原八幡宮や渡御のお旅所などで舞う「本舞」に大別され、舞の形式には、道中舞・本舞それぞれに「幌舞」と「幣舞」がある。幌舞では、1人が獅子頭を被り、もう1人が布を広げて持ち、2人で舞う。幣舞では、1人が獅子頭を被り、右手に鈴、左手に御幣を持ち、もう1人が布を丸めて持ち、2人で舞う。神楽を舞うためには、舞子のほか、笛・太鼓合わせて5人は必要であるという。



図2-10-29 神輿を先導する八幡神楽 (昭和34年(1959))



図2-10-30 道中舞(幌舞)



図2-10-31 本舞(幌舞)

道中舞も本舞も基本的には同じで、順序としては幌舞のあとに幣舞を行う形態となっているが、本舞では、幌舞のあと、「みな 三尺の大的さを持ちてな～ 悪魔を祓せ 泰平楽世と改まらんせ …」と唱えながら幣舞に移行する。また舞の終盤には、右手に御幣を持ち大きく回しながら舞ったり、また、本舞の最後は、1人が獅子頭を持ち、獅子頭を足下まで下げると同時に、もう1人が布を高く持ち上げ、獅子を大きく見せながら舞うなど、道中舞よりも舞いにバリエーションが増える。



図2-10-32 本舞(幣舞)

また、現在では神楽舞だけを演じているが、昭和の時代までは神楽芝居(獅子狂言)をやっていたり、正月の神楽舞の門付けを昭和50年代まで行い、集落の悪魔祓いをしていたという。

八幡神楽保存会では、水窪まつりや神原八幡宮の霜月祭り(例大祭)以外にも、山住の大祭やイベントなどでも神楽を舞っており、多くの休止してしまった神楽舞伝承地の舞に代わり、伝統を継承し続けている。

④まとめ

中央構造線が付近をとおり、「塩の道」とも呼ばれた秋葉街道が縦断し、宿場町として栄えた水窪町の市街地は、山間の市街地として、山間部の特徴と市街地の特徴を併せ持っており、他の地域からの影響をあまり受けずに受け継がれてきた神原の虫送りが行われたり、屋台の出る賑やかな祭りである水窪まつりが開催されるなど、特徴的な行事とこれらが関係する建造物、そして周辺の市街地や山間の景観とが一体となって良好な歴史的風致を形成している。

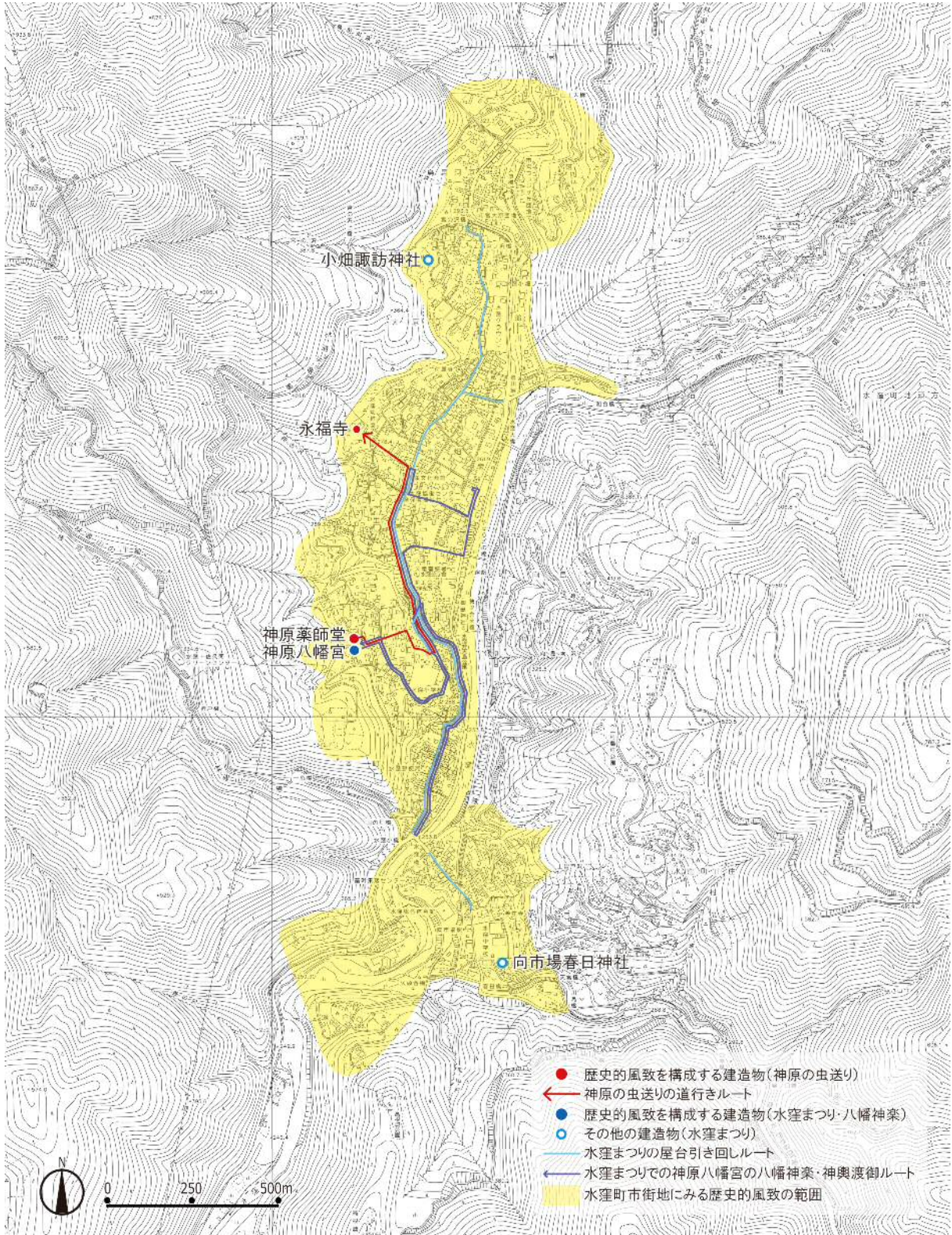


図2-10-33 水窪町市街地における歴史的風致の範囲

(4) 佐久間町川合地区にみる歴史的風致

①はじめに

天竜区佐久間町の川合地区は、天竜川の支流、大千瀬川が中央構造線に沿うように流れるその川岸から山の中腹にかけて営まれた集落である。川合地区は、佐久間町に天竜川の支流、大入川又は大千瀬川流域から伝わったと言われる花の舞が伝承され、今も続けられている数少ない集落の一つであり、地域をあげて伝承活動に取り組んでいる。



図2-10-34 川合地区

②歴史的風致を構成する建造物

ア.八坂神社

天竜区佐久間町川合に鎮座する川合の産土神で、素戔鳴尊を祀る。毎年10月最終土曜から、翌日曜の朝方にかけて川合花の舞が奉納される。

八坂神社の社殿は桁行5間、梁間2間、木造、切妻造妻入りの拝殿に1間の接続部を挟み、そのうしろに切妻造平入りの本殿が接続している。権現様と言われる山の頂上にあつたものを、明治の初めに現在の地に移したと言われており、「明治廿九年(1896)九月」に拝殿が造営され、「昭和三十年(1955)



図2-10-35 八坂神社拝殿

八月」に本殿及び拝殿の建物改修をした棟札が残る。例大祭では、境内で川合花の舞が奉納されている一方、本殿手前の拝殿では、浦安の舞が奉納される。

③佐久間町川合地区にみられる活動

ア.川合花の舞

a.川合花の舞の歴史

川合花の舞は、天竜区佐久間町川合の八坂神社に伝承されている湯立神楽で、五穀豊穡、無病息災を祈る祭りであり、「花の三ツ」や「山見鬼」、「榊鬼」など、最大で20番にもなる演目の総称でもある。かつては、土地の旧家で八坂神社の鍵採り¹の平賀家で行われていたが、現在では、八坂神社の霜月祭典(例大祭)の奉納芸能として、八坂神社の境内で行われている。

¹ お宮の鍵を保管する役目。

「花の舞」は奥三河地方に数多くある霜月神楽の「花祭」が静岡県側にも伝わり、傳承されてきたもので、いずれも鬼が登場する。浜松市側の起源は詳らかでないが、中世のころ、中央構造線の谷筋に沿って移動してきた修験者たちにより伝えられ、在地の信仰と習合し定着したものとされている。芸能自体が「花の舞」と呼称されているのは、複数の舞の演目のうち、子供たちが花笠を被って踊る花の三ツなどの「花の舞」という演目があることから、この舞が強調され芸能全体を表す名称となったと言われている。

佐久間町の「花の舞」についての記録には、今田に残る寛政11年(1799)霜月の年号を記した『御湯探秘法大事』の古文書を書き写したのものがあるほか、「川合花の舞」については、早川孝太郎著『花祭』(昭和5年(1930))にも記載されている。

川合花の舞は、昭和37年(1962)には川合花の舞保存会が結成され、また、地区住民は幼少のころから舞を舞い、伝統を受け継ぐなど、保存会と自治会が手を合せて地域をあげて継承活動に取り組んでいる。

b. 川合花の舞の特徴

現在、川合花の舞は、天竜区佐久間町川合の八坂神社の例大祭に、奉納芸能として行われている。八坂神社の例大祭は、10月最終の土曜日・日曜日に行われる。神事のほか、土曜日の宵祭りには、拝殿で浦安の舞の奉納が行われ、境内では、宵祭りの日の夕方から日曜日の本祭りの日の明け方にかけて、夜通し、川合花の舞の奉納が行われる。

川合花の舞は、舞処の装置から採り物、芸能などがすべてにわたって独特な雰囲気醸し出している。当日、八坂神社境内には、神社拝殿の前庭に、注連縄で区画された2間四方の舞処が設けられ、中央には注連縄をまいて紙垂(カイダレ)を付けた湯釜が据え付けられる。湯釜の真上には、キリコと呼ぶ人面に似た切り紙で装飾された白蓋が吊るされ、白蓋と四隅の支柱の間には湯蓋が飾られる。湯蓋にはザゼチと呼ばれる半紙一枚に神社名や、鳥居、野菜などを切り出したものが取り付けられる。このほか、五色の色紙で出来た紙垂を舞処の注連縄に取り付ける。これら白蓋、湯蓋、紙垂は舞処の舞台空間を結界するものである。また、湯蓋の一つには、「山見鬼」の演目で使用されるハチノスが取り付けられる。

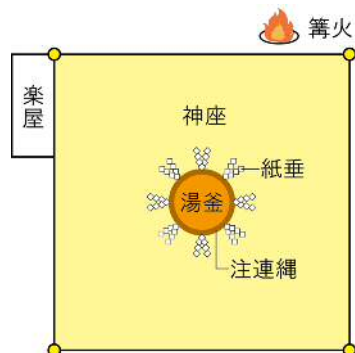


図2-10-36 舞処の装置(床を上からみたところ)

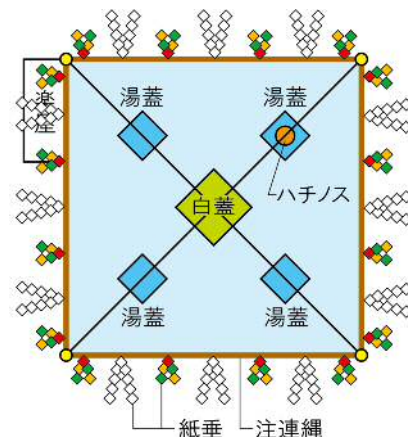


図2-10-37 舞処の装置(天井を上からみたところ)

川合花の舞は、湯立の祭儀と採り物の舞、面形の舞の三つに分けられる。舞人は、榊・刀剣・マサカリなどの採り物と呼ばれる道具を持って舞い、背中には「買い花¹」と言われる紙札が付けられる。数ある舞のなかでも、特に鬼の面を付けた「山見鬼」・「榊鬼」の演目が見どころで、「山見鬼」での舞処天井に吊るされたハチの巣を鬼がマサカリで破る演出は、奥三河の花祭りの一部と川合花の舞のみに見られる。また、「榊鬼」では、禰宜役と鬼との問答が繰り広げられる。また、舞の途中で味噌を参詣者になすりつけて回る「おかめ」や、湯たぶさ²を釜の湯に浸して舞処の四方から参詣者に振りかける「湯ばやしの舞」など、参詣者も巻き込む舞も含まれている。



図2-10-38 川合花の舞(舞処と湯ばやしの舞)
(舞処中央の湯釜上部の白蓋やそこから四隅の支柱の間に吊るされた湯蓋、舞処周囲の注連縄や紙垂で舞処が結界されている)

c.川合花の舞の流れ

■川合花の舞の準備

川合花の舞の準備は、2か月ほど前に祭典委員会が立ち上がるころから始まる。

祭りを進めるにあたり当番にあたる房事番が決められる。房事番の仕事は、①神社拝殿での祭事準備、②幟立て、③注連縄作り、④榊・竹の用意、⑤浜水汲み、⑥衣装の洗濯がある。

10月に入ると、注連縄作りと松明作りを行い、新藁から新しい注連縄を作っていく。松明は杉や檜の角材に松の木を挟み針金で縛る。この松明は、山見鬼や榊鬼の舞で使われる。

10月の中旬には、舞の練習が始まり、衣装合わせも行われる。また、街道に祭り周知用の幟旗が立てられ、大千瀬川の河原では祭りの行事の時間を知らせる煙火場の整地が行われる。

祭りの一週間前、房事番は山に入り、榊の木採りをする。榊鬼で使用するもののほか、舞処や神社に飾るものを含め全部で17本選び、採ってきた榊は祭り当日まで、神社下の湧水のところで保管する。

舞処の設営と、これに必要な飾りの準備も地区住民の手によって行われる。

白蓋、湯蓋などの舞処の飾りの作成は花きりと言われ、古老から若者まで一緒になって作業を行い、ザゼチ、紙垂、キリコ、ハチノスなど、色紙を切っていく。

中茶屋の設営や、ここで販売される五平餅とおでんも地区住民の手によってつくられる。五平餅は愛知・長野・静岡の県境地域の郷土食で、御飯を串焼きにしたもので、川合地区では楕円形に形作り、すりおろした柚子をたっぷり入れた味噌ベースのたれが特徴である。この五平餅は、川合花の舞のなかの演目「おかめ」でも採り物として用いられ、おかめら舞子4人は一踊りしたあと、味噌を参詣者になすりつけて回る。また、おでんも、夜を徹して行わ

¹ 舞人の背に付けられる紙札のこと。神様に祈願する人が、願い事を舞人(舞子)に託して舞を奉納するもので、紙札には願い事と願い主の名前が書いてある。

² 藁を箒のように束ねたもの。

れる川合花の舞には、体を温めるのに欠かせない食べ物である。

■川合花の舞の流れと当日の様子

川合花の舞当日は、舞処の設営や舞処の中央の釜に入れられる浜水汲みが行われる。

舞の始まる前には、社殿で氏子らに配るお札やお守りなどの「縁起物祈禱祭」及び安全に花の舞が奉納できることを祈って「舞処清払い祭」が行われる。

舞に先立ち、舞処では汲んできた浜水を湯釜に入れ、舞子や氏子が火や湯を被っても怪我や過ちが無いよう禰宜役が火伏の祈禱を行う。禰宜役が行う神事は湯立てを中心に行われる。湯釜に向かって祭文を唱え、神々を勧請する。この湯を持って祭場を清め、勧請した神々に湯を献じ、舞人や氏子たちも清め、罪穢れを祓って祈禱するものである。

舞人が手にする鈴・榊・鉾・刀剣・マサカリなどは採り物と呼ばれるが、これらは一種の依代¹であり、これを持って舞うことにより採り物で清め、祭場の除魔を行い神を招く。

川合花の舞の令和元年(2019)度の演目の詳細は表2-10-5のとおりである。川合花の舞は、「花の舞」のほか、「金山の舞」、「扇の舞」、メインとなる「鬼の舞」など最大で20番に達するが、近年では時代に合わせて演目数を減らしている。それぞれ、舞人が採り物を持ち、笛・太鼓・歌楽に合わせて五方(東西南北と中央)に舞う。笛・太鼓の音色は、山間の集落に静かに響き渡り、川合地区全体が祭りの雰囲気¹に包まれる。



図2-10-39 川合花の舞(花の三ツ)



図2-10-40 川合花の舞(榊鬼)



図2-10-41 川合花の舞(おかめ)

¹ 祭りにあたり、神がよりつく対象物。

表2-10-5 川合花の舞次第(令和元年(2019)度)

次第	開始予定時刻	備考	
1	地固め	15:00	湯立の祭儀 舞いに先立ち舞処を踏み固める意味の舞。
2	金山の二ツ	15:50	
3	扇の三ツ	17:00	
4	榊の三ツ	17:30	
5	八千代の三ツ	18:00	
6	花の三ツ	18:40	花の舞の語源となった舞とも言われ、花の舞を代表する稚児の舞。
7	金山の三ツ	19:10	
8	山見鬼	20:00	面形の舞 山見鬼 ¹ があばれて天井の湯蓋のハチノスを叩き落とし、山見鬼・伴鬼・天狗が激しく乱舞する。
9	ボーツカ ¹ の四ツ	20:50	
10	八千代の四ツ	21:30	
11	花の四ツ	22:10	
12	金山の四ツ	22:50	
13	榊鬼	0:00	面形の舞 花の舞を代表する舞で榊鬼と禰宜との問答がある。 問答に打ち負かされた榊鬼は舞処いっぱい到大マサカリを天地に振って乱舞し、途中で小型のマサカリに替え、燃え盛る湯釜の火を四方にかき散らす。榊鬼・伴鬼・天狗が乱舞し、舞が最高潮を迎える。
14	おかめ	1:10	面形の舞 舞子が舞処で一踊りしたあと、境内全域を動きまわり、味噌が付いた五平餅を参詣者になすりつけてまわる。味噌を塗られることは縁起の良いこととされている。
15	湯ばやし	1:30	湯立の祭儀 舞処での最後の舞で、途中、禰宜が登場し、湯釜に向かって湯伏せを行う。御祈禱が済むと舞子は湯たぶさを湯釜の中につけ、湯の玉を参詣者に振りかける。 湯の玉のしぶきを浴びると、無病息災などの御利益があると言われる。
16	湯上げ	2:20	湯立の祭儀 舞子をはじめ祭関係者が湯釜を囲み、鈴を鳴らして「湯立の歌楽」を謡う。
	終了	2:40	

※上記表の舞のうち、備考欄に「湯立の祭儀」または「面形の舞」の記載のないものは、「採り物の舞」である。

¹ 「山の神」とも言われる。

④まとめ

中央構造線の存在によって生まれた道を通った修験者などによってもたらされた、湯立てを伴う霜月神楽の一つである川合花の舞は、現在も地域をあげて活動と継承が行われており、例大祭において舞が奉納される八坂神社の建造物や、幟を立てられるなどして祭りの雰囲気が高まった川合地区やこの集落が存する山間の景観など、周辺環境と一体となって、大切に守り育てたい歴史的風致を形成している。

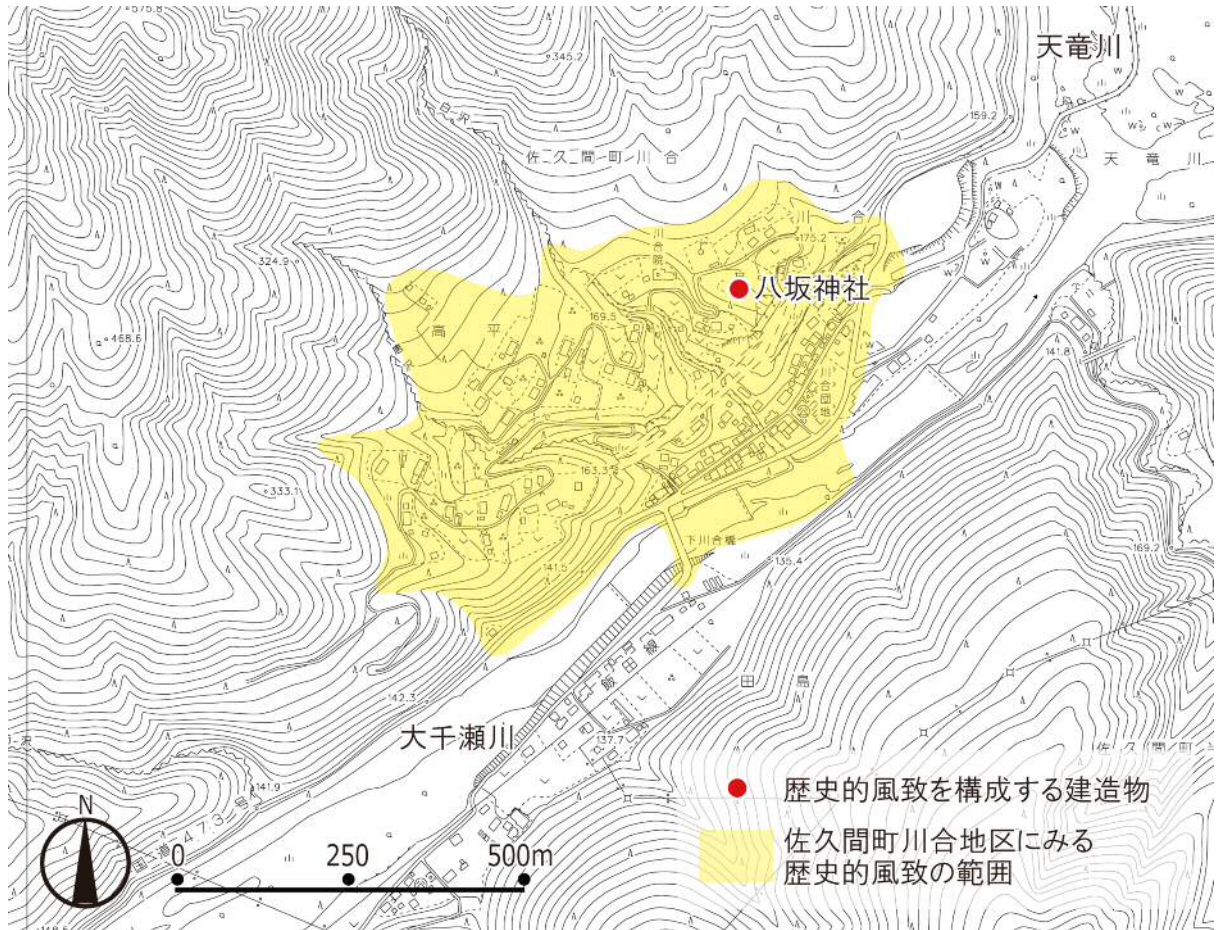


図2-10-42 佐久間町川合地区にみる歴史的風致の範囲

(5) 佐久間ダムにみる歴史的風致

①はじめに

佐久間ダムは、天竜川と大千瀬川との合流地点から上流へ2.5キロメートルあたりの地点に位置する。この場所は、西側の離山と東側の矢岳山の谷間を天竜川が流れており、水量が多く、中央構造線が通るこの辺りは、川の両岸が切り立ち、強固な岩盤がむき出しになっていることなどからダム建設地に選ばれた。

この地では、ダムの繁栄祈願とダム建設工事犠牲者慰霊のため、毎年、竜神の舞が奉納されている。



図2-10-43 佐久間ダム(ダム湖を臨む)

②歴史的風致を構成する建造物

ア. 佐久間ダム

佐久間ダムは昭和31年(1956)4月23日に運転(営業発電)を開始し、同年(1956)10月15日に竣工式が行われた、静岡県と愛知県をまたいで天竜川に設置された重力式コンクリートダムで、洪水吐ゲート5門、放水管2門、堤高155.5メートル、堤頂長293.5メートル、発電量は最大出力35万キロワット、完成当時は日本一の規模を誇った水力発電用ダムである。昭和31年(1956)には、現在でも管理・運営を続ける電源開発株式会社により、竣工記念誌『佐久間ダム』が発行されている。



図2-10-44 佐久間ダム全景

佐久間ダムは天竜川の中流の南アルプス山稜部の急流に、天竜川水系の基幹ダムとして、近代科学の粋を結集して建設された。天竜川が山間部で大きく蛇行し大千瀬川と合流する地点より2.5キロメートルほど上流地点は、水量が多く、中央構造線が通るこの辺りは、天竜川の両岸が切り立ち、強固な岩盤がむき出しになっていることなどにより、早くからここにダムを建設し、貯水して発電させようという開発案があったという。ここに堰堤が設けられ、その上流33キロメートルにわたりダム湖ができた。国策の特殊会社である電源開発株式会社により昭和28年(1953)に着工され、昭和31年(1956)に竣工式が行われた佐久間ダムは、我国のダム建設史上初めて全面的な機械化により施工され、3年間という短期間で完成したが、一方で、工事における犠牲者もあり、また、山室の集落が全水没、国鉄飯田線の佐久間～大嵐駅間が付け替えされるなど、犠牲や社会への影響も少なくなかった。

佐久間ダムは、現在でも、日本屈指の規模と発電量を誇り、運用され続け、また、ダムに

よって形成された人造湖は佐久間湖と命名され、ダム湖百選に選定されている。また、この一帯は天竜奥三河国定公園に指定されており、地域の主要な観光地になっている。ダム湖畔では、毎年10月、ダム湖を臨む広場で佐久間ダム竜神まつりが開催されている。

イ.佐久間ダム建設に伴う犠牲者の慰霊碑

佐久間ダム竜神まつりが開催される、佐久間ダム東湖畔のダム湖を臨む広場の一角に、佐久間ダム建設で犠牲になった方々の「慰霊碑」が建つ。幅約4メートル、高さ約2メートル、堰堤をかたどったとされるこの慰霊碑は、その銘板から、昭和31年(1956)10月14日に建造されたことがわかる。慰霊碑の裏側には、ダム建設で犠牲になった96名の名が刻まれている。

佐久間ダムは、我国のダム建設史上初めて全面的な機械化により施工され、3年間という短期間で完成したが、一方で、死者96人、重軽傷者4,800人余りという多くの犠牲も出した。

現在、毎年10月に行われている佐久間ダム竜神まつりでは、ダム建設工事で犠牲となった方々の慰霊の意も込めて、竜神の舞が舞われている。



図2-10-45 慰霊碑

③佐久間ダムにみられる活動

ア.竜神の舞

竜神の舞は、毎年10月最終日曜日に佐久間ダム湖畔の広場で行われる「佐久間ダム竜神まつり」で披露されている。この舞は、昭和32年(1957)10月28日の昭和天皇・皇后両陛下の佐久間ダム行幸啓を永く記念し、ダムの繁栄祈願と工事犠牲者の霊を慰めるため、ダム建設犠牲者慰霊祭に奉納されたことに始まると言われており、昭和36年(1961)の広報佐久間に、竜神の舞が舞われた記事が見受けられる。この慰霊祭は、次第に慰霊祭に地域のイベント的な要素が加えられるようになり、現在では佐久間ダム竜神まつりと名を変えたが、ダムの繁栄祈願と工事犠牲者の慰霊のための竜神の舞は、今でも続けられている。

この竜神は、皇居のお堀に住む緋鯉と真鯉がダムの守護神として放流されたことから、この鯉が佐久間ダムにすみ、それが竜神になって現れるとの解釈のもと、竜の胴体は蛇ではなく鯉のうろことされている。また、宝珠は、ダム建設の犠牲者96人の御霊の象徴とされており、竜神の舞では、宝珠を守護して竜神が勇壮に舞う。

竜神は湖上を舟で渡御してダム湖岸に上陸し、そこからダム広場までの階段を昇っていく。宝珠、7人が支える竜神、付き人などが順に進み、ダム広場を横切り、その上にあるダム建設犠牲者が祀られる慰霊碑まで昇ると、一行はまず慰霊碑に参拝する。そしてダム広場に戻り、竜神の舞を披露する。竜神の舞は、太鼓、ドラ、カネ、チャップが威勢良く打ち鳴らされ、爆竹の音が轟き渡るなか、7人の男たちが長さ約15メートルもある竜神を巧みに操り、

竜神が宝珠を守護するように舞われる。広場にはスモークが焚かれ、雲上で竜神が飛翔するかのような演出がなされる。

この竜神の舞は、ダム建設に関わった間組を介して東京・浅草の浅草寺に伝わる「金龍の舞」を教わり、これをもとに佐久間町中部の商店街の組織(中部商栄会)により創設された。竜神保存会(現佐久間竜神の舞保存会)が結成され、次世代へ継承していく役割を担うとともに、佐久間ダム建設で命を落とした方を供養するため、佐久間ダム竜神まつりで舞の奉納が続けられている。



図2-10-46 竜神の舞

④まとめ

中央構造線の影響を受けた地盤の特徴と天竜川の存在によってこの地に建造されることになった佐久間ダムの湖畔では、ダムの繁栄祈願と工事犠牲者の霊を慰めるため、毎年、竜神の舞が佐久間ダム竜神まつりで奉納されており、佐久間ダム及び豊富な水をたたえたダム湖と周辺の山間の景観などと一体となって良好な歴史的風致を形成している。

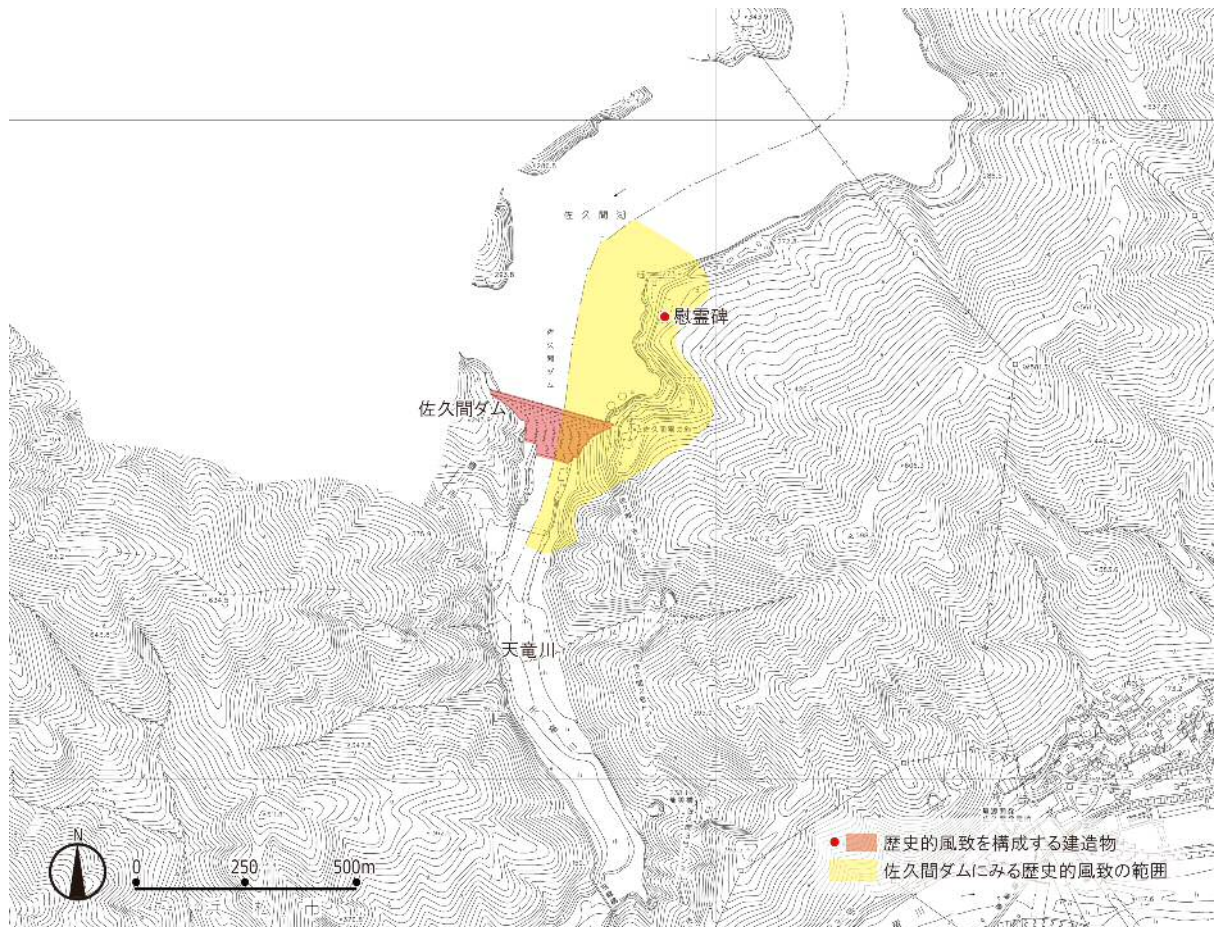


図2-10-47 佐久間ダムにみる歴史的風致の範囲

(6)まとめ

中央構造線は、地質学的にも特徴的であるだけでなく、周辺の集落の景観や暮らしにも大きな影響を与えている。

中央構造線沿いに点在する集落は、急峻な傾斜のある地形をうまく利用して築かれており、そうした場所では、平野部や、緩やかな傾斜の山間部とは違う特徴的な景観が作りあげられている。山間からそうした集落を見ると、水窪の市街地のように、山林と集落との対比や山の形状などから、中央構造線沿いに集落が営まれていることが良く見て取れ、そうした集落側からは、西浦の集落のように、山裾付近の視界が抜け、中央構造線が周囲の景観に溶け込んでいることがよくわかる。また、天竜川の流域のなかでも中央構造線の西側にあって強固な岩盤がむき出しになっており、かつ豊富な水量が確保できた場所に佐久間ダムが建設されるなど、これらの地域は中央構造線との関わりが深いことがわかる。

また、こうした中央構造線沿いに点在する集落では、西浦の田楽や川合花の舞、神原の虫送りなどのように、それぞれの地に特徴的な祭事が、中央構造線の存在によって生まれた道を通った修験者などによってもたらされ、奥三河・信州などとの繋がりをも感じられるこうした民俗芸能や祭礼は、道の整った平野部などの集落と違ってほかからの影響を受けにくく、古式の伝統を保ったまま、地域住民によって大切に守り伝えられてきている。こうした、そこに住まう人々の信仰を物語る民俗芸能や祭礼、そして佐久間ダム建設時の犠牲者の慰霊から始まった竜神の舞などは、これらが行われる場所にある建造物や、建造物の位置する集落や中央構造線が位置する山間の景観と一体となって良好な環境を形成しており、今後も維持向上していきたい歴史的風致である。

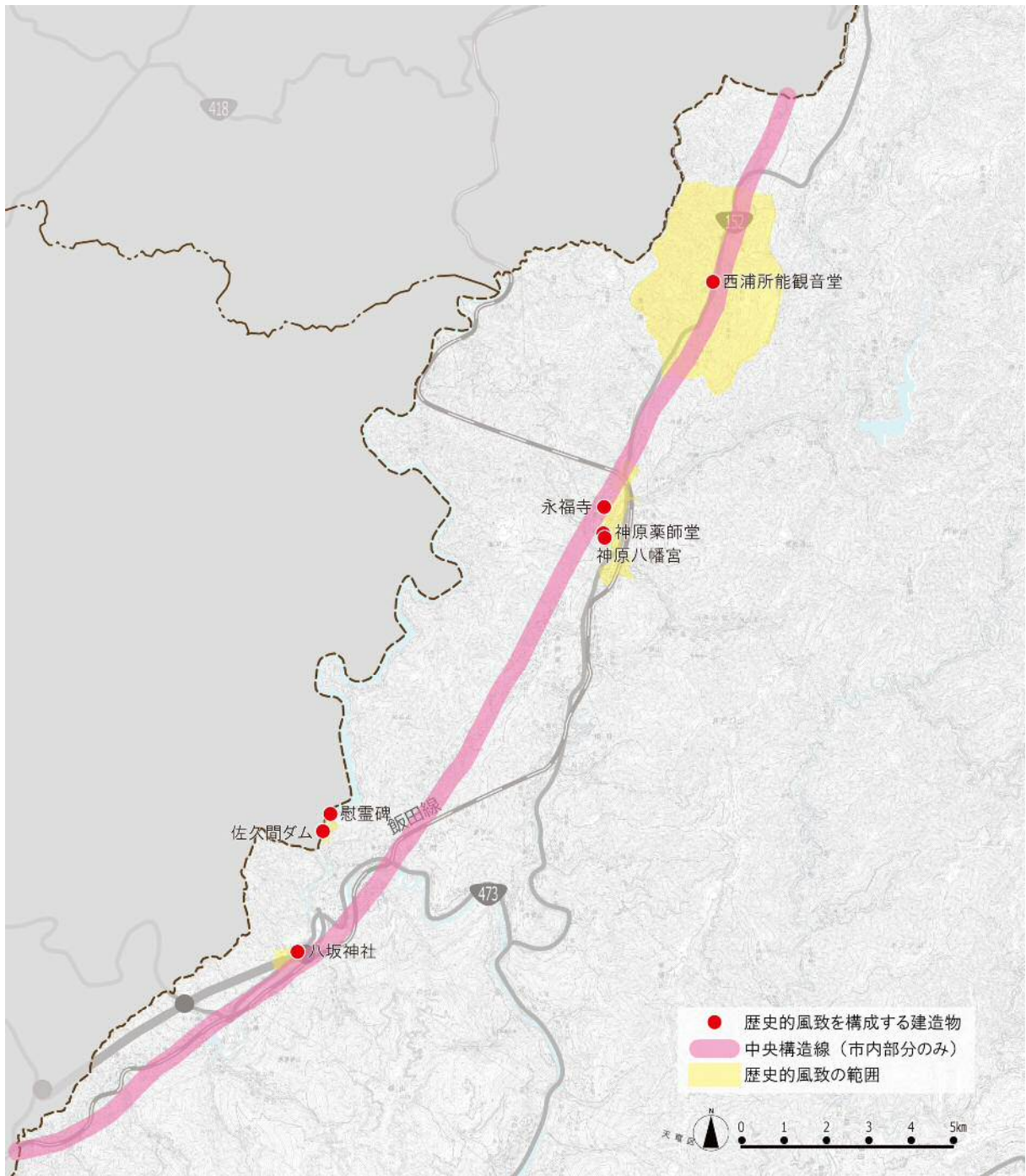


図2-10-48 中央構造線沿いに点在する集落の祭礼と信仰にみる歴史的風致の範囲

ちょっといづく
コラム

飯田線と渡らずの鉄橋

中央構造線沿いの谷地形は、谷筋に沿った街道を生み、古代・中世から、人々が往来し、集落やまち並みが築かれた。近代では、この谷地形を利用して、鉄道(現JR飯田線)が通っている。この鉄道には、中央構造線の影響を受けた地質の悪さが災いし、トンネル工事中に梅雨期の降雨で崩落などがあり、やむなくその部分を迂回したためにできた「渡らずの鉄橋」と呼ばれる鉄橋がある。これは、対岸に渡らず元の岸側に戻る全国的に珍しい鉄橋で、飯田線名物となっている。



図2-10-49 渡らずの鉄橋